

那須火山末期の形成史

藤 田 和 久

本研究は那須火山の主峰茶臼岳を中心とする那須火山末期の火山体を地形発達史の視点から捉え、その形成史を空中写真観察と野外での地形・地質調査から明らかにしようとしたものである。その結果次のことが明らかになった。

1) 約3万年前、日の出平と朝日岳の間にかつて存在していたと考えられる那須主成層火山体が、恐らく小規模な水蒸気爆発に誘発され山体大崩壊を起こし、崩壊した岩屑は岩屑流となって東南麓に流下し御富士山岩屑流堆積面を形成した。大崩壊した跡は東開きの馬蹄形カルデラとなった。

2) 大崩壊直後にはカルデラ壁などから岩屑の生産が急増し、大雨の時や隔雪期に土石流などの形をとって山麓に運ばれ火山麓扇状地を急速に形成した。

3) 馬蹄形カルデラ内では火山活動が再開された。火砕流が噴出し山麓にまで流下し大沢火砕流堆積面を形成した(約16,000年前)。

4) しばらくして火砕丘・溶岩円頂丘の形成、溶岩円頂丘の破壊による小規模火砕流の発生などが繰返し起こった。火砕流堆積物などが累積し大丸火砕流群堆積面を形成した(約6,000年前)。

5) 茶臼岳の基部をつくる茶臼溶岩流の流出、その上位に茶臼火砕丘・茶臼溶岩円頂丘が形成された。

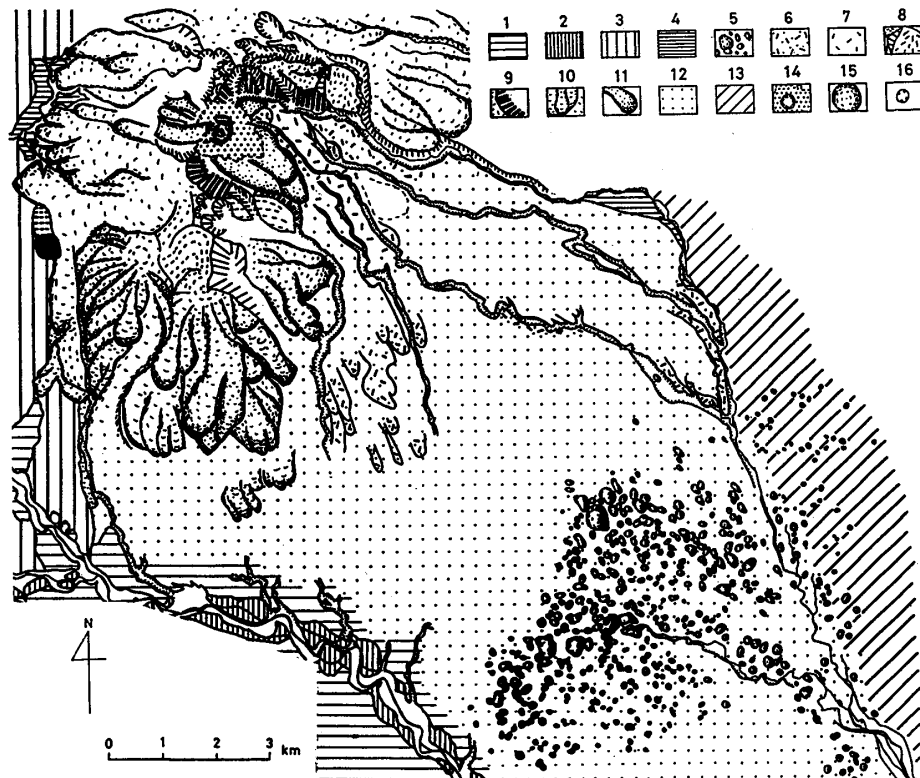


図 那須火山の地形分類図

- 1: 那須野が原扇状地面 2: 那珂川段丘群面 3: 山地 4: 段丘面 (未対比) 5: 流れ山 6: 大沢火砕流堆積面 7: 大丸火砕流群堆積面 8: 地すべり 9: 馬蹄形カルデラ 10: 溶岩流原面 11: 茶臼溶岩流原面 12: 火山麓扇状地 13: 丘陵 14: 茶臼火砕丘 15: 茶臼溶岩円頂丘 16: 火口